

埼玉医科大学の母体病院として、同大学病院グループの第4病院の役割を担い、地域の“医療と福祉の理想郷”を目指す

明治25年、毛呂病院の名で埼玉県初の病院として開設された丸木記念福祉メディカルセンターは、埼玉医科大学の母体病院として、安全で質の高い医療・福祉を実践している。令和4年には創立130年、大学開設50年の節目を迎える同センター。理念である「限りなき愛」のもと、医療と福祉の理想郷の実現に向けて大きく歩を進める。



センター長 丸木 多恵子氏

- 代 表 者 センター長 丸木 多恵子
- 開 設 明治25年9月
- 職 員 数 741名(全領域施設を含む)
- 事業内容 病院・診療所、高齢者介護施設、障害者施設等の経営
- 所 在 地 〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38
TEL 049-276-1496 FAX 049-276-1497
- U R L <https://www.saitama-mwa.or.jp/maruki/>

社会福祉法人埼玉医療福祉会丸木記念福祉メディカルセンター(旧・毛呂病院)は、明治25(1892)年、埼玉県初の病院として開設された。長い歴史を持つ同センターは、埼玉医科大学の母体病院でもある。内科、リハビリテーション科、緩和ケア内科、精神科、歯科を診療科目とし、内科病棟、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、緩和ケア病棟、精神病棟、計616床を有する。

また、関連施設として介護老人保健施設およびケアハウス「薫風園」、特別養護老人ホーム「ナーシングヴィラ本郷」と老人福祉センター「山根荘」、精神に障害を持つ患者の支援施設「やすらぎ」「のぞみ」「いこい」、そして地域包括ケアシステム構築の中核施設となる「くらしワンストップMORO HAPPINESS館」を擁する。

「当センターは“限りなき愛”を基本理念に、患者さま・ご利用者さまに満足度の高い医療と福祉の実現を目指しています」(丸木多恵子センター長)

同センターが担う役割は五つある。

一つは、地域包括ケアシステムの中核的病院・福祉施設としての役割。埼玉医科大学病院グループの

第4病院の役割を担い、急性期を脱した亜急性期の患者の在宅復帰を支援する役割。同センターが運営する福祉施設の関連病院としての役割。そして、行政の委託機関としての役割と、実習施設としての役割である。

➔ 医療と福祉に注力してきた130年の歴史

同センターは明治25年に毛呂病院として、現在の埼玉医科大学が建つ地に誕生した。初代院長は丸木清太郎氏、標榜科目は内科、外科、伝染病科であった。

明治35年に国からの要請で精神科を併設。当時の新聞では埼玉県唯一の精神病院と紹介され、作業療法を取り入れるなど最先端の治療を行っていた。

戦後間もない昭和22(1947)年、八高線で当時世界最大規模の鉄道事故が起きる。180名を超える死者と多数の負傷者が出る大惨事となったこの事故で、多くの患者の治療にあたったのが同院であった。

「当時、不眠不休で治療にあたりましたが、手の施しようがない人も多かったと聞きました。助けたくとも

助けられなかった多くの命を目の前にした3代目院長・丸木清美は、さらに質の高い病院を目指すことを決意します。そして昭和27年5月、毛呂病院は社会福祉法人となりました」

昭和39年に総合病院となり、昭和47年には埼玉県から医科大学新設の要請を受けて、同院の一般病床を寄付する。その病床を基に埼玉医科大学が開設され、同院は母体病院となった。

平成に入り、社会で高齢者介護の問題が取り沙汰されるようになると、平成10(1998)年に複合施設薫風園を開設。それをスタートに、地域のニーズに応えながら、高齢者介護施設や精神障害者の支援施設を開設していった。さらに並行して同院も、回復期リハビリテーション病棟や在宅医療室、埼玉県認知症疾患医療センター等を開設し、地域の医療と福祉の拡充に努めていった。そして、平成28年に、法人名と病院名称を現在のものに変更する。

➔ 大学病院と地域医療を結ぶハブとなる

同センターの特徴は、医療と福祉の両輪体制を敷く、埼玉県で最も多くの機能を有する病院であるということ。そして、埼玉医科大学病院グループと地域医療機関の連携のハブとして、地域の医療と福祉を支援しているという点だ。

具体的には、地域医療機関や介護保険施設等からの患者を同センターで受け入れ、専門治療が必要となった場合には、高度急性期病院である埼玉医科大学病院グループに受け入れを要請する。同大学病院グループからは病状が安定した患者を受け入れ、リハビリを行って在宅復帰の支援をしたり、介護施設の入居などにつなげる。また、在宅復帰した患者に向けては、在宅医療や介護・看護等の支援を行う。

こうして同センターは、毛呂山町・越生町および近隣市町村の地域医療と介護、福祉、健康に関する支援を包括的に行っている。

「埼玉県の高齢者増加率は全国的に見ても高く、

この先、埼玉県の高齢者対策は非常に重要です。今後当センターは、地域包括ケア病棟をはじめ薫風園など多様な機能を相互に連携させて、地域包括ケアシステムの中心的な役割を果たしていきたいと思います」

➔ 忘己利他の精神で患者と利用者尽くす

平成29年に開設された、くらしワンストップMORO HAPPINESS館は、地域包括ケアシステムの拠点と



丸木記念福祉メディカルセンター



薫風園



ナースングヴィラ本郷

して、医療と福祉の一元的な窓口となる施設だ。

内科・整形外科の外来診療と併せて、24時間365日、医師が対応する訪問診療を行うほか、在宅医療や介護、認知症の問題など、地域住民が抱えるさまざまな悩みや不安を解決する支援も行っている。さらに、学びや健康づくり、仲間づくりの場としても活用され、高齢者の健康寿命を延ばす数多くの取り組みも進めている。

令和元(2019)年には、終末期の在宅患者の救急要請にすぐに医師が駆け付けられるよう、埼玉県

初のホスピスカーを導入する。そこには、最期まで自宅で過ごしたいと願う人たちに応えたい、という同センターの理念がある。

「埼玉医科大学の設立に深く関わった故・丸木清浩名誉理事長は、自分のことは後にして人に尽くしてこそ幸せがあると“忘己利他”を座右の銘としていました。また、世の中がどうなっていくか、どう進めばよいかを常に考えていました。この姿勢は、現在の丸木清之理事長に引き継がれています」

同センターは、毛呂病院開設から代々引き継がれ

の増加が見込まれる。団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となる“2025年問題”が目の前に迫る今、同センターでも人材の確保が急がれている。

「人材の確保と育成に力を入れていきます。そのためにも、職員がやりがいを持って安心して働ける、魅力ある職場づくりを続けていきます。若い方にも来ていただけるよう、住みやすい街づくりにも貢献していきます」

同センターは医療施設や介護施設に、外国人職員も含めた若い人材を採用するため、奨学金制度の整備を進めている。一つは就職を希望する学生の在学中に給付するもの、もう一つは、就職して奨学金の返済を続けている職員を支援するものだ。

また、社会福祉法人が担う地域における公益的な取り組みとして、毛呂山町や地域ボランティアと連携し「HAPPINESS館こども食堂」や「健康生きがいづくり事業」を行っている。今後も、魅力あふれる街づくりに尽力していく考えだ。

→ SDGs事業で地域に貢献する

同センターは令和4年に創立130年、埼玉医科大学開設から50年という節目を迎える。

「基本理念“限りなき愛”やミッションである“Your Happiness is Our Happiness(あなたの幸せが私たちの幸せです)”の考え方は、SDGsの理念と共通するものです。そのため創立130周年にあたり、SDGsの推進にも取り組んでまいります」

前述した奨学金給付事業もSDGs推進事業の一つで、他にも一人親世帯のキャリア支援や子どもの学習支援、地域高齢者のフレイル(心身虚弱)予防などの事業を推し進めていく。

今後も、目まぐるしく変わる時代の変化に柔軟に対応しながら、全職員が一丸となって患者・利用者に満足度の高いサービスを提供していく同センター。医療と福祉が融合する理想郷の実現という大きな目標に向けて、着実に歩を進めている。



ている「医療を福祉の中心に据えるべき」という精神のもと、すべての患者に安全で質の高い医療・福祉を提供してきた。

運営する高齢者施設には地域の住民のみならず、口コミで評判を聞きつけて都内や広島、富山など遠方から訪れる入居者もいるという。

→ 魅力的な職場づくりと街づくりに注力

高齢化が進み、今後はますます介護施設利用者